中学生のキャリア意識と家族・友人に対するコミュニケーション内容の関連

新見直子・前田健一

The relationship between career awareness and communication contents with family or friends of junior high school students

Naoko Niimi and Kenichi Maeda

本研究では中学生を対象に，家族や友人とのコミュニケーション内容とキャリア意識4領域（人間関係形成，情報活用，将来設計，意思決定）との関連について群間比較を通して検討した。その結果，次の2点が明らかになった。①学校や進路に関する話を家族とする生徒ほど，4領域のキャリア意識が高い。②学校や進路に関する話を友人とする生徒ほど，人間関係形成，情報活用，意思決定のキャリア意識が高い。これらの結果は，家族や友人とのコミュニケーションが職業選択の基盤となる能力・態度・知識等の自己評価，すなわちキャリア意識の発達に寄与する可能性を示唆する。
キーワード：キャリア意識，コミュニケーション内容，家族，友人，中学生

問　題

Hartung, Porfeli, & Vondracek（2005）は，中学生以前のキャリア発達研究をレビューし，就職前のキャリア発達課題の達成に関連する能力・認知の習得度（キャリア成熟度, Super, 1990）が年齢に伴って発達することを示唆するとともに，家族要因（例えば，社会経済的地位，保護者の職業）がキャリア成熟度の主要な関連要因であると指摘している。Keller & Whiston（2008）は，具体的な保護者の行動（サポート，情報提供や励まし）の各項目を予測変数とし，中学生のキャリア成熟度の合成得点を目的変数とする階層的ロジスティック回帰分析を使用して，家族要因とキャリア成熟度との関連を検討している。その結果，保護者の行動に関する4項目が中学生のキャリア成熟度に有意な正の関連を示した。これらの項目は，「私の親は私に自分で決定するように促す」，「私にとって重要な10代の問題に興味をもってくれる」，「私の親は私のことを誇りに思っているといってくれる」のように，中学生と家族のコミュニケーションを前提とした相互理解，信頼，援助に関する内容であった。これらの項目内容を考慮すると，保護者と親密なコミュニケーションを日ごろから多く行っている中学生ほどキャリア成熟度が高い可能性が示唆される。

ところで，Keller & Whiston（2008）の研究では保護者からの情報提供や励ましは，キャリア成熟度とほとんど関連しなかった。例えば，「私の親は特定の職業についての資料を提供してくれる」等

の情報提供に関する質問内容は，職業選択に直面していない中学生にとってはまだ関心度や必要度の低いものであったのであろう。中学生にとって関心度の高い進学等に関する項目を使用していれば，情報提供や励ましとキャリア成熟度との間に有意な関連が見出されたかもしれない。そこで本研究では，中学生にとって関心度の高い「学校に関する内容」と「進路に関する内容」を取り上げ，これらの内容に関する家族とのコミュニケーションの程度とキャリア成熟度との関連を検討する。

就職前のキャリア成熟度に関する先行研究は，上述の家族要因の他に，多様な適応要因がキャリア成熟度と関連することを明らかにしている（例えば，Creed, Prideaux, & Patton, 2005; Skorikov, 2007）。Skorikov（2007）は，高校2年生から卒業半年後までの間に質問紙調査を4回実施し，各時点における適応要因（自尊感情，生活満足度，一般的自己効力感，感情安定性，社会的適応）や不適応要因（うつ傾向，不安）とキャリア成熟度の合成得点との関連を検討している。パス解析の結果，いずれの時点においても，適応要因はキャリア成熟度と正の関連を示し，逆に不適応要因はキャリア成熟度と負の関連を示した。特に，生活満足度（$\beta = .10 \sim .22$）や社会的適応（$\beta = .14 \sim .25$）のような適応要因がキャリア成熟度とより強く関連していた。また Creed et al.（2005）は，キャリア成熟度の高低に基づいて高校生を成熟群と未成熟群に分類し，自尊感情や生活満足度等について群間比較を行っている。その結果，生活満足度では成熟群が未成熟群よりも有意に高かった。

Creed et al.（2005）と Skorikov（2007）に共通する結果は，生活満足度がキャリア成熟度と関連することである。生活満足度は生活全般に対する個人の満足度を表すが（Neto, 1993），高校生では学校で過ごす時間が長いので，彼らの生活満足度は学校生活に対する満足度や学校適応感を反映している可能性が高い。このように考えると，学校生活に対する満足度や学校適応感のような適応要因が高校生のキャリア成熟度と関連するといえよう。榎本（2003）は，友人とのコミュニケーション（相互理解活動）や友人関係の性質（信頼・安定）が高校生や中学生の学校適応感（充実感）に正の関連を示すことを見出している。学校適応感とキャリア成熟との関連および学校適応感と友人とのコミュニケーションとの関連を実証した研究結果を考え合わせると，友人とのコミュニケーションもキャリア成熟度と正の関連を示すと考えられる。本研究ではこの関連についても検討する。

高校生に比べると，中学生では学校適応感とキャリア成熟度の関連を検討した研究は報告されていない。その主な理由は，中学生のキャリア成熟度を測定する尺度が開発されていないからである。新見（2008）は，わが国のキャリア教育（文部科学省, 2006）で重視されている4領域（人間関係形成，情報活用，将来設計，意思決定）のうち，情報活用，将来設計，意思決定の3領域が既存のキャリア成熟尺度に含まれていることを指摘し，4 領域の能力・態度等を測定する中学生用のキャリア意識尺度を開発している。本研究では，このキャリア意識尺度を使用して，家族や友人とのコミュニケーションとキャリア意識との関連を検討することを主な目的とする。

方　法

対象者　中学校の生徒242名（男子120名，女子122名）を対象者とした。その内訳は中1が77名（男子38名，女子39名），中2が83名（男子41名，女子42名），中3が82名（男子41名，女子41名）であった。

調査時期　2007年12月に質問紙調査を実施した。

調査内容　以下の3つの尺度を使用した。

1．**キャリア意識尺度**：新見（2008）が中学生を対象に作成し，一定の信頼性と妥当性を確認した，中学生版キャリア意識尺度4領域27項目（人間関係形成9項目，情報活用5項目，将来設計6項目，意思決定7項目）を使用した（表1）。各項目内容に対してそう思う程度を6段階（1：まったくそう思わない，2：あまりそう思わない，3：どちらかというとそう思わない，4：どちらかというとそう思う，5：わりとそう思う，6：とてもそう思う）で評定させた。4領域別に項目平均値を算出し，それらを各領域得点とした。したがって，4つの領域得点の得点範囲は1点～6点にわたる。

表1　キャリア意識尺度項目

項目
人間関係形成（α＝.80）
1 友だちのよいところをもっと知りたいと思う
2 友だちが困ったときには，助けることができると思う
3 友だちの気持ちを大切にすることができると思う
4 自分がいやなことは，友だちにはっきり言うべきだと思う
5 友だちのよくないところは注意すべきだと思う
6 ふざけて友だちをからかわないようにしたいと思う
7 違う学年の人とも話をしたいと思う
8 自分の気持ちや考えを友だちにわかりやすく伝えることができると思う
9 友だちに悪いことをしたと思ったら謝ることができると思う
情報活用（α＝.70）
1 高校ではどんな勉強するのかを知りたいと思う
2 わからないことは，先生や友だちに聞くことができると思う
3 調べたことを人にわかりやすく発表することができると思う
4 働いている人はどのようにして，その職業についたのかを知りたいと思う
5 学級の係や当番の仕事は，きちんとやることが大切だと思う
将来設計（α＝.74）
1 そうじや係の仕事は自分がしなくても他の人がしてくれると思う *
2 みんなで決めた係や仕事は，きちんとやりたいと思う
3 やる気になったら，家のそうじや手伝いができる思う
4 子どもは，将来のためにしっかりと勉強すべきだと思う
5 計画や時間を決めて勉強したいと思う
6 やる気になったら，集中して勉強することができると思う
意思決定（α＝.80）
1 何でも最後は自分で決めたいと思う
2 みんなと意見が違っても，自分の意見を言うことができると思う
3 すぐにできなくても，できるまでがんばろうと思う
4 失敗しても，あきらめずに，うまくいくまでがんばろうと思う
5 友だちとけんかしても，うまく仲直りができると思う
6 難しいことでも，やる気になったら，できると思う
7 自分のしたことには自分で責任をもつことが大切だと思う

* 逆転項目

2．家族とのコミュニケーション内容：はじめに，日ごろ一番話をする家族を，父親，母親，祖父，祖母，おじ，おば，親戚，その他，の8つの中から選択させた。その他を選択した生徒には，その家族を具体的に記述するよう求めた。次に，表2に示す学校に関する内容（α = .80）と進路に関する内容（α = .80）について，選択した家族と話をする程度を5段階（1：まったく話さない，2：あまり話さない，3：少し話す，4：わりと話す，5：とてもよく話す）で評定させた。内容別に項目平均値を算出し，それらを家族とのコミュニケーション得点とした。したがって，2つの家族とのコミュニケーション得点の得点範囲は1点～5点の範囲にわたる。

3．友人とのコミュニケーション内容：家族とのコミュニケーション内容と同様に，表2に示す学校に関する内容（α = .71）と進路に関する内容（α = .81）について，友人と話をする程度を5段階（1：まったく話さない，2：あまり話さない，3：少し話す，4：わりと話す，5：とてもよく話す）で評定させた。内容別に項目平均値を算出し，それらを友人とのコミュニケーション得点とした。したがって，2つの友人とのコミュニケーション得点の得点範囲は1点～5点の範囲にわたる。

手続き　調査実施と調査内容について対象校の承諾を得た後，学校を通じて学級単位で調査を集団実施した。回答にあたって答えにくい項目がある場合には，無理にその項目に回答しなくてもよいことを調査用紙に印刷して説明した。

表2　コミュニケーション内容項目

項目
学校に関する内容
1 学校の友だちのこと
2 学校の授業のこと
3 学校の先生のこと
進路に関する内容
1 卒業後の進路のこと
2 将来つきたいと思う仕事のこと

結　果

一番話をする家族の内訳　日ごろ一番話をする家族として生徒がどの家族を選択したのかについて，家族別・学年別に人数を集計した（表3）。表3をみると，その他を選択した者が各学年とも比較的多かったので，その他の家族として具体的に記入された対象を確認した。その結果，中1（17名），中2（13名），中3（15名）のいずれの学年においても，きょうだい（兄，弟，姉，妹）のいずれかをあげた生徒が多かった。

家族とのコミュニケーションの特徴　家族とのコミュニケーション内容（学校，進路），学年，性別を要因とする3要因分散分析を行った（表4）。なお，いずれの家族とのコミュニケーション得点においても家族成員間で有意差が認められなかったので，一番話をする家族を一括して分析することにした。家族とのコミュニケーションについて回答しなかった1名を除いた241名のデータに基づく分散分析の結果，コミュニケーション内容の主効果が有意であり（$F(1, 235) = 7.05, p < .01$），学校に関する内容（$M = 2.85$）が進路に関する内容（$M = 2.67$）よりも有意に高かった。性別の主効

表3　一番話をする家族の人数内訳

	中1	中2	中3
父　親	9	3	3
母　親	44	59	49
祖　父	0	2	2
祖　母	3	1	4
その他	18	15	19
計	74	80	77

注）日ごろ一番話をする家族を選択しなかった1名と複数の家族を選択した10名は除外した。

表4　家族とのコミュニケーション得点の平均値と標準偏差（*SD*）

	中1		中2		中3	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
学校に関する内容	2.56	3.04	2.61	3.04	2.70	3.15
	(0.84)	(0.91)	(1.15)	(0.98)	(1.06)	(1.01)
進路に関する内容	2.61	2.37	2.49	2.54	2.70	3.28
	(1.19)	(0.98)	(1.16)	(1.01)	(1.18)	(1.13)

果も有意であり（$F(1, 235) = 6.42, p < .05$），女子（$M = 2.90$）が男子（$M = 2.61$）よりも有意に高かった。学年の有意傾向もみられ（$F(2, 235) = 3.01, p = .05$），下位分析の結果，中3（$M = 2.96$）が中1（$M = 2.65$）よりも高い傾向にあった。また，コミュニケーション内容と学年の交互作用が有意となり（$F(2, 235) = 3.12, p < .05$），進路に関する内容では中3（$M = 2.99$）が中1（$M = 2.49$）や中2（$M = 2.51$）よりも有意に高かったが，学校に関する内容では有意な学年差は示されなかった。コミュニケーション内容と性別の交互作用も有意であり（$F(1, 235) = 5.17, p < .05$），学校に関する内容では女子（$M = 3.08$）が男子（$M = 2.62$）よりも有意に高かったが，進路に関する内容では有意な性差は認められなかった。

友人とのコミュニケーションの特徴　友人とのコミュニケーション内容（学校，進路），学年，性別を要因とする3要因分散分析を行った（表5）。分散分析（$N = 242$）の結果，コミュニケーション内容の主効果が有意であり（$F(1, 236) = 301.82, p < .001$），学校に関する内容（$M = 3.52$）が進路に関する内容（$M = 2.44$）よりも有意に高かった。学年の主効果も有意となり（$F(2, 236) = 5.80, p < .01$），中3（$M = 3.22$）が中1（$M = 2.81$）や中2（$M = 2.90$）よりも有意に高かった。性別の主効果も有意であり（$F(1, 236) = 10.83, p < .01$），女子（$M = 3.15$）が男子（$M = 2.81$）よりも有意に高かった。また，コミュニケーション内容と学年の交互作用が有意となり，進路に関する内容については中3（$M = 2.83$）が中1（$M = 2.26$）や中2（$M = 2.23$）よりも有意に高かったが，学校に関する内容では有意な学年差はみられなかった。

群構成　家族や友人と進路に関する内容よりも学校に関する内容を話す傾向にあったことは，内容によって家族や友人とのコミュニケーションとキャリア意識との関連性に相違がみられる可能性を示唆する。そこで，学校に関する内容と進路に関する内容を話す程度に基づいて群を構成し，内

表5 友人とのコミュニケーション得点の平均値と標準偏差(*SD*)

	中1		中2		中3	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
学校に関する内容	3.09	3.62	3.48	3.67	3.54	3.67
	(0.83)	(0.79)	(0.88)	(0.79)	(1.05)	(0.86)
進路に関する内容	2.17	2.35	2.05	2.42	2.50	3.16
	(1.10)	(1.02)	(0.99)	(1.01)	(0.98)	(0.86)

容別の群間比較を通して，家族や友人とのコミュニケーションとキャリア意識との関連を検討することにした。まず，学校に関する話を家族や友人とする程度の平均値（家族 $M = 2.85$，友人 $M = 3.52$）に基づいて群を構成した。その結果，学校に関する話を家族と友人のどちらとも多くする群（学校・高高群）には87名（中1の25名，中2の31名，中3の31名）が分類された。学校に関する話を家族とは多くするが，友人とはあまり話をしない群（学校・高低群）には39名（中1の14名，中2の11名，中3の14名）が分類された。学校に関する話を家族とはあまりしないが，友人とはよく話をする群（学校・低高群）には42名（中1の11名，中2の17名，中3の14名）が分類された。学校に関する話を家族と友人のどちらともあまりしない群（学校・低低群）には73名（中1の27名，中2の23名，中3の23名）が分類された。

次に，進路に関する話を家族や友人とする程度の平均値（家族 $M = 2.67$，友人 $M = 2.44$）に基づいて群を構成した。その結果，進路に関する話を家族と友人のどちらとも多くする群（進路・高高群）には73名（中1の18名，中2の22名，中3の33名）が分類された。進路に関する話を家族とは多くするが，友人とはあまり話をしない群（進路・高低群）には32名（中1の10名，中2の13名，中3の9名）が分類された。進路に関する話を家族とはあまりしないが，友人とはよく話をする群（進路・低高群）には53名（中1の13名，中2の13名，中3の27名）が分類された。進路に関する話を家族と友人のどちらともあまりしない群（進路・低低群）には83名（中1の36名，中2の34名，中3の13名）が分類された。なお，いずれの群構成においても，家族とのコミュニケーションについて回答していない1名を群構成の対象から除外した。

学校に関する内容に基づく群間比較　学校に関する話を家族や友人とする程度によって4領域のキャリア意識に違いがみられるか否かを検討するために，2（学校に関する話を家族とする程度の高低）×2（学校に関する話を友人とする程度の高低）×3（学年）の多変量分散分析を行った（表6）。その結果，学校に関する話を家族とする程度の高低の主効果が有意であった（$F(4, 226) = 5.10$, $p < .01$）。領域別にみると，人間関係形成（$F(1, 229) = 14.62$, $p < .001$），情報活用（$F(1, 229) = 12.84$, $p < .001$），将来設計（$F(1, 229) = 17.98$, $p < .001$），意思決定（$F(1, 229) = 8.29$, $p < .01$）の4領域すべてで有意差がみられ，学校の話を家族とする者（人間関係形成 $M = 4.25$，情報活用 $M = 4.42$，将来設計 $M = 4.61$，意思決定 $M = 4.38$）は，あまりしない者（人間関係形成 $M = 3.88$，情報活用 $M = 4.00$，将来設計 $M = 4.13$，意思決定 $M = 4.05$）よりも有意に高かった。学校に関する話を友人とする程度の高低の主効果も有意であった（$F(4, 226) = 3.04$, $p < .05$）。領域別にみると，人間関係形成（$F(1, 229) = 8.21$, $p < .01$），情報活用（$F(1, 229) = 5.59$, $p < .05$），意思決定（$F(1, 229) = 10.42$, $p < .01$）の3領

域で有意差がみられ，学校の話を友人とする者（人間関係形成 $M = 4.21$，情報活用 $M = 4.34$，意思決定 $M = 4.40$）は，あまりしない者（人間関係形成 $M = 3.92$，情報活用 $M = 4.07$，意思決定 $M = 4.04$）よりも，これら 3 領域のキャリア意識が有意に高かった。

進路に関する内容に基づく群間比較　進路に関する話を家族や友人とする程度によって 4 領域のキャリア意識に違いがみられるか否かを検討するために，2（進路に関する話を家族とする程度の高低）×2（進路に関する話を友人とする程度の高低）×3（学年）の多変量分散分析を行った（表 7）。その結果，進路に関する話を家族とする程度の高低の主効果が有意であった（F (4, 226) = 6.20, $p < .001$）。4 領域別にみると，人間関係形成（$F(1, 229) = 10.32, p < .01$），情報活用（$F(1, 229) = 24.35, p < .001$），将来設計（$F(1, 229) = 9.99, p < .01$），意思決定（$F(1, 229) = 11.03, p < .01$）の 4 領域すべてで有意差がみられ，進路の話を家族とする者（人間関係形成 $M = 4.26$，情報活用 $M = 4.55$，将来

表6　学校に関する話をする程度に基づく4群のキャリア意識領域得点の平均値と標準偏差（*SD*）

		家族との話　高		家族との話　低	
		友人との話　高	友人との話　低	友人との話　高	友人との話　低
人間関係形成	中1	4.27 (0.62)	3.94 (0.70)	4.02 (0.82)	3.65 (0.62)
	中2	4.62 (0.63)	4.13 (0.59)	3.88 (0.86)	3.83 (0.58)
	中3	4.43 (0.70)	4.12 (0.89)	4.00 (0.77)	3.86 (0.92)
情報活用	中1	4.36 (0.92)	4.19 (0.85)	4.07 (1.10)	3.82 (0.97)
	中2	4.72 (0.74)	4.18 (0.68)	3.94 (0.86)	3.88 (0.65)
	中3	4.65 (0.77)	4.40 (0.71)	4.33 (0.72)	3.95 (1.03)
将来設計	中1	4.54 (0.82)	4.17 (0.88)	4.03 (0.82)	3.81 (0.83)
	中2	4.79 (0.73)	4.89 (0.60)	4.14 (0.83)	4.04 (0.88)
	中3	4.61 (0.75)	4.64 (0.68)	4.64 (0.56)	4.14 (1.08)
意思決定	中1	4.52 (0.76)	3.96 (0.75)	4.17 (1.05)	3.83 (0.81)
	中2	4.78 (0.71)	4.26 (0.59)	4.17 (0.90)	3.93 (0.87)
	中3	4.51 (0.76)	4.24 (0.72)	4.24 (0.70)	3.99 (1.06)

表7　進路に関する話をする程度に基づく4群のキャリア意識領域得点の平均値と標準偏差（*SD*）

		家族との話　高		家族との話　低	
		友人との話　高	友人との話　低	友人との話　高	友人との話　低
人間関係形成	中1	4.15 (0.65)	4.27 (0.60)	3.97 (0.59)	3.77 (0.75)
	中2	4.56 (0.83)	3.93 (0.52)	4.17 (0.57)	4.03 (0.75)
	中3	4.37 (0.72)	4.30 (0.80)	4.16 (0.81)	3.44 (0.86)
情報活用	中1	4.76 (0.72)	4.66 (0.54)	3.89 (0.76)	3.69 (0.99)
	中2	4.67 (0.99)	3.95 (0.45)	4.42 (0.73)	4.02 (0.73)
	中3	4.61 (0.76)	4.64 (0.68)	4.36 (0.68)	3.49 (1.08)
将来設計	中1	4.39 (0.87)	4.53 (0.74)	3.87 (0.71)	4.01 (0.92)
	中2	4.79 (0.93)	4.38 (0.67)	4.81 (0.64)	4.14 (0.84)
	中3	4.75 (0.75)	4.65 (0.56)	4.30 (0.73)	4.12 (1.19)
意思決定	中1	4.57 (0.81)	4.30 (0.67)	4.01 (0.49)	3.89 (0.96)
	中2	4.82 (0.99)	4.21 (0.85)	4.27 (0.65)	4.11 (0.72)
	中3	4.48 (0.64)	4.35 (0.79)	4.17 (0.85)	3.90 (1.23)

設計 $M = 4.58$, 意思決定 $M = 4.46$）は，あまりしない者（人間関係形成 $M = 3.93$, 情報活用 $M = 3.98$, 将来設計 $M = 4.21$，意思決定 $M = 4.06$）よりも，すべてのキャリア意識が有意に高かった。進路に関する話を友人とする程度の高低の主効果も有意であった（$F(4, 226) = 2.97, p < .05$）。領域別にみると，人間関係形成（$F(1, 229) = 6.90, p < .01$），情報活用（$F(1, 229) = 10.48, p < .01$），意思決定（$F(1, 229) = 4.80, p < .05$）の 3 領域で有意差がみられ，進路の話を友人とする者（人間関係形成 $M = 4.23$, 情報活用 $M = 4.45$，意思決定 $M = 4.39$）は，あまりしない者（人間関係形成 $M = 3.96$，情報活用 $M = 4.08$，意思決定 $M = 4.13$）よりも，これら 3 領域のキャリア意識が有意に高かった。また，進路に関する話を家族とする程度の高低と学年の交互作用も有意であった（$F(8, 452) = 1.99, p < .05$）。下位分析の結果，情報活用のみで有意差が示され（$F(2, 229) = 4.70, p < .05$），中 1 と中 3 では進路に関する話を家族とする者（中 1 の $M = 4.71$, 中 3 の $M = 4.63$）は，あまりしない者（中 1 の $M = 3.79$, 中 3 の $M = 3.93$）よりも有意に高い得点を示したが，中 2 では有意差が認められなかった。

考　察

本研究では，家族や友人とのコミュニケーションと中学生のキャリア意識との関連について群間比較を通して検討した。学校に関する内容と進路に関する内容別に，家族や友人と話をする程度の高低を組み合わせて 4 群を構成し，群間比較をした結果，コミュニケーション内容に関わらず，家族と多く話をする者は，家族とあまり話をしない者よりもキャリア意識 4 領域が有意に高かった。一方，友人と多く話をする者は，友人とあまり話しをしない者よりも人間関係形成，情報活用，意思決定のキャリア意識が有意に高かった。相関値を算出した結果，家族や友人と学校に関する内容について話す者ほど進路に関する内容も話す関係（家族 $r = .46, p < .01$，友人 $r = .48, p < .01$）にあった。これらの結果から，コミュニケーションの内容よりも家族や友人と良好な関係を築いているか否かがキャリア意識やキャリア成熟度に関連するといえよう。

4 領域のキャリア意識のうち将来設計では，学校や進路に関する話を友人とする者としない者の間に有意差がみられなかった。この結果は中学生の友人関係の特徴を反映している可能性がある。中学生と高校生の友人関係の特徴を比較した柴橋（2004）によると，中学生は高校生よりも友人とのコミュニケーションにおいて「友だちを困らせるようなことは言いたくない」等の相手を配慮する傾向が強い。また，落合・佐藤（1996）は，高校生や大学生と比較して中学生が友人関係において親密性を重視することを見出している。他方，表 1 の将来設計項目には「みんなで決めた係や仕事は，きちんとやりたいと思う」や「計画や時間を決めて勉強したいと思う」等の集団生活における規律やルールを守ることや学習習慣に関する項目が含まれていた。中学生の友人関係に関する先行研究（落合・佐藤, 1996; 柴橋, 2004）を参考にすると，中学生は学校や進路に関する話を友人とするときに，友人のルール違反を注意したり，将来のために学習習慣をつけるよう友人に忠告することが少ないと思われる。そのため本研究では，友人とのコミュニケーションの程度と将来設計との間に有意な関連がみられなかったものと解釈される。

最後に，本研究の問題点と今後の課題について 3 点指摘する。第 1 に，本研究では家族とのコミュニケーション得点において家族成員間で有意差がみられなかったことから，保護者（父，母）と

きょうだい等を一括して分析を行った。しかし，保護者ときょうだい等ではキャリア発達過程に果たす役割が異なると考えられるので，今後は保護者，年長のきょうだい，年少のきょうだい等に分類して検討を重ねる必要がある。第 2 に，本研究では中学生のコミュニケーションの相手として家族と友人を取り上げたが，キャリア意識がキャリア教育で重視している 4 領域に基づくことを踏まえると，キャリア教育を実践している教師とのコミュニケーションの内容や程度とキャリア意識との関連についても検討していく必要がある。第 3 に，友人関係の特徴が中学生，高校生，大学生で異なる（落合・佐藤, 1996）ことから，コミュニケーション内容とキャリア意識の関連を発達的に検討することで，各発達段階のキャリア発達に果たす友人の役割が明らかになると期待される。

引用文献

Creed, P., Prideaux, L.-A., & Patton, W. (2005). Antecedents and consequences of career decisional states in adolescence. *Journal of Vocational Behavior*, **67**, 397-412.

榎本淳子 (2003). 青年期の友人関係の発達的変化: 友人関係における活動・感情・欲求と適応 風間書房

Hartung, P. J., Porfeli, E. J., & Vondracek, F. W. (2005). Child vocational development: A review and consideration. *Journal of Vocational Behavior*, **66**, 385-419.

Keller, B. K., & Whiston, S. C. (2008). The role of parental influences on young adolescents' career development. *Journal of Career Assessment*, **16**, 198-217.

文部科学省 (2006). 小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引き: 児童生徒一人一人の勤労観，職業観を育てるために

Neto, F. (1993). The Satisfaction with Life Scale: Psychometrics properties in an adolescent sample. *Journal of Youth and Adolescence*, **22**, 125-134.

新見直子 (2008). 中学生版キャリア意識尺度の開発 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部(教育人間科学関連領域), **57**, 225-233.

落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的変化 教育心理学研究, **44**, 55-65.

柴橋祐子 (2004). 青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因 教育心理学研究, **52**, 12-23.

Skorikov, V. (2007). Continuity in adolescent career preparation and its effects on adjustment. *Journal of Vocational Behavior*, **70**, 8-24.

Super, D. E. (1990). A life-span, life-space approach to career development. In D. Brawn, L. Brooks, & Associates (Eds.), *Career choice and development: Applying contemporary theories to practice*. 2nd. San Francisco: Jossey-Bass.